Bulletin of Tokyo Library Association

東京都図書館協会報

No.94　2014 年 8 月

－平成 25 年 7 月 12 日（金）講演会－

『図書館における魅力的な空間のつくり方』

建築家・株式会社岡田新一設計事務所
柳瀬　寛夫 氏

ご紹介いただきました柳瀬寛夫と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は、普段は岡田新一設計事務所で設計の仕事をしております。数年前より明治大学で司書講習メディア授業と夏期講習の「図書館建築と施設計画」の一部を担当する機会をいただくようになりました。去年からは早稲田大学教育学部にて、同じ日本図書館協会施設委員会委員である栗原研究室代表の川島 宏先生と１週おき、交互に「図書館施設論」の授業をしています。その春学期が終わり７回の授業を通して、学生とのやりとりは本当におもしろい、それを実感しています。ですから、本日は、学生から私の方が学んでいることも踏まえながら、これから図書館を新たにつくるというよりは、今ある図書館をどう変えていけるのかという視点を中心に、進めさせていただきます。

まず、日ごろ学生に呼びかけていることを４点。第１に「ソフトとハードの関係性」。より高度なソフト展開に、ハードを使いこなす知恵とアイデアは欠かせない。知恵もアイデアも、基礎知識と日常の問題意識がなければ生まれないはずです。

第２に、「図書館の持つ潜在力に注目すること」。図書館本来の働き、あわせて私の授業では、大勢の人が集まってくるなど、図書館の持つ特性や現象を洞察し、可能性を探る。これからの社会になくてはならない図書館像をいろいろな視点で考えてみようという呼びかけをしています。

３番目は、「デザイン感覚を磨こう」。今日のテーマは、ほとんどこれに尽きるかもしれません。日常の意識が重要です。例えば、美術館に行くときだけ、ではなくて、毎日の生活の中で自分のデザイン感覚を磨く意識が、魅力的な図書館をつくっていく原動力になります。図書館をより魅力的にしていくために、図書館員自身のデザイン感覚は欠かせないのではないでしょうか。それは図書館に限らず、どのような仕事に就いても確かな武器になること、そして自分自身がより豊かに生きるうえでも有益であることをイメージして欲しいと願っています。

４番目は、仕事としての価値から図書館を捉えるべきということです。人の喜びを我が喜びにできる仕事はやりがいがあります。図書館司書は間違いなくその一つだと思います。私も建築の設計という仕事はそうありたいと思っています。人の喜びにつながる仕事と自覚できれば長続きもします。

図書館の現場では時にクレームもあるでしょうが、黙って無表情にみえる大半の利用者は感謝しています。図書館とは、知りたい、学びたいことをサポートしてくれる、市民にとってありがたい存在です。人に喜んでいただける仕事として、喜びを持って図書館員という仕事を捉えるべきではないか。仮に図書館員にならなくても、人に喜ばれる価値観で仕事を選んでほしい、以上４点を呼びかけています。

それでは、スライドを使って、具体的に話を進めて参ります。まず最初は、静岡県の「吉田町立図書館」の一コマです＜写真１＞。児童開架エリアの子ども用の椅子は、弊社の伝統的なデザインで、既製品にもなっています。この椅子の特長の一つは大き

な座面にあります。普通の子ども用の椅子は座面が低いだけでなく座面そのものも小さくなっています。それはそれでかわいらしいのですが、実際には、大人が横並びに座ることも多く、座面が小さいと座りづらい。児童開架エリアは子どもが使う場所と思い込んでしまうと、大人の存在を忘れてしまいます。先日、改めて、岡田弘子会長に、いつごろからこの椅子が弊社の定番になっているか尋ねたところ、「藤沢市総合市民図書館」の設計の時で20年ほど前とのことでした。「子どもは、お母さんと同じ椅子に座りたがる」発想からのデザインであることを再確認しました。ですから、家族で使いこなすことを前提に、座面の大きさが大人用と変わらない所がこの椅子のミソです。

＜写真1＞低くなっても座面の大きさの変わらない椅子

若いお母さんは座が低くても苦にならないでしょうが、おじいちゃん、おばあちゃんは、よっこらしょとなってしまいますので、あわせて座面の高い椅子も用意しておきます。次の写真は、現在は取手市立になっている「ふじしろ図書館」の児童開架エリア。座の高めの椅子におじいちゃんが座って、子どもと同じ空間にいる安心感に浸っている風景です。

「新潟市立中央図書館」のこどもとしょかんにも大き目の椅子が置いてあります。子ども用椅子の座面の高さは、低学年までの 30ｃｍと、高学年用 34ｃｍの２種類を用意しています。違いが分かるように座面の色を黄色とオレンジ色に塗り分けています。もちろん大人も座れる座面の大きさです。

このような話を、去年の授業で取り上げました。90分授業の最後10分間で、思い思いにレポートを書いてもらうのですが、人間科学部から聴講に来ている女子学生のレポートに、九州の保育園では47ｃｍの高さの椅子を使っていたとありました。保育園における読書環境について１週間泊まり込みで調査したようです。47ｃｍは相当な高さです。皆さんが今、座っている椅子が44ｃｍ程度です。実際どのような椅子か写真を見せてもらいました＜写真２＞。

＜写真 2＞保育園の座の高い椅子（野坂梨子さん撮影）

子どもたちは後ろ姿ですが、みんな先生の方をみて集中していますね。先生も非常に真剣なまなざしです。もう１人の若い先生は、腰を下ろして目線を子どもたちに合わせています。47ｃｍの椅子は先生と子どもたちの目線を近づかせる狙いがあり、その効果がてきめんであることを証明する写真です。

実際にこの種のベルト付の椅子は家庭でもよく使われているのではないかと思いますが、その効果を期待して、そのまま図書館には採用できません。家庭や保育園だから管理できることを図書館でできるとは限らず、もしベルトを掛けずに子どもが落ちて怪我でもしたら、安全でない椅子を置いていたとして、図書館長が訴えられてしまうかもしれません。

それでは図書館にて、低い椅子が苦手なおじいちゃん、おばあちゃんと、子どもたちの目線を近づけるにはどうすればいいか、そういう課題を、私は学生から突き付けられ、ただ大人用の椅子を置いておけば良いというレベルに留まってはいけないことに気づかされたわけです。これは難しい問題で、明快な答えはいまだに見いだせておりません。

一つのヒントとして、「新潟市立中央図書館」の造付のベンチがあります＜写真３＞。観察しているとおじいちゃん、おばあちゃんと子どもが一緒に並んで絵本を読んだりするのはこのベンチが多い。だけど座の高さは同じです。目線の高さの違いを体の密着度が補っているのかもしれません。座の高さは大

人の方を優先し、やや高めでも子どもは足をぶらぶらさせながら対応しています。

＜写真3＞横並びしやすいベンチ

また、子ども用椅子の座の高さは30ｃｍと34ｃｍを組み合わせていますが、今後は34ｃｍだけにしようかとも思っています。その理由はもう一つあります。今、皆さんに回覧しているニューヨークの学校図書館の本『The L!BRARY Book』。早稲田の授業では毎回、１冊か２冊、私がいいなと思う本を回覧しているのですが、この本の中に、椅子とデスクの高さのアンバランスな写真があるが、どういう理由なのでしょうか、という質問がありました。そのページに付箋を貼りましたので、よくご覧ください。私はその学生から指摘されるまで気が付きませんでした。学校図書館ですから、おそらくデスク・椅子ともに低いタイプと高いタイプを組み合わせて、身長の差に対応しようとしているはず。だけど、掃除する作業員が、そのような意図を知らされていない場合には、元に戻す時に椅子とデスクがごちゃごちゃになる可能性が高い。このことは日本の図書館でも十分あり得ることなので、今後は34ｃｍだけの方がむしろ運営しやすいのではないか、次の設計の機会に図書館員の皆さんと議論してみようと思っています。

床材の違いに応じた椅子の脚の選び方についても学生から問題提起がありました。床材については、一般的にカーペット、フローリング、シート系の３種類が多いのですが、まず言えることは、子どものスペースにカーペットは避けた方が良い。子どもはぺたんと床に座りがちです。アトピー性皮膚炎の子どものことを考えると、カーペットよりフローリングとかシート系の方が清掃しやすく清潔さを保ちやすいので望ましい。それに対し一般開架は、考え方次第ですが、奥の方の窓際はカーペットが適していると思います。それは椅子を引いた時に発する音が利用者間にストレスを生むからです。水濡れと耐久性の点で、エントランスまわりにカーペットは不向きですが、奥であれば摩耗も少なくカーペットの利点を活かせます。という話を学生にしましたら、カーペットの場合には椅子の脚はこういう形が引っかかりが少なく扱いやすいと、スレッジベースの絵を描いてくれました。偶然その翌日、キャンパスチェアという世界中で評価されている椅子に、新たにスレッジベースが加わるという報を聞き、次の授業で＜写真４＞を紹介しました。というように、学生の物の捉え方は素直であり刺激的です。

＜写真4＞カーペットの床ではスレッジベース・タイプが使いやすいとの学生の指摘を受けた直後に、たまたま紹介を受けたキャンパスチェアの新商品（手前）

これは千葉県八千代市の図書館マップです。現在は大和田、八千代台、勝田台、緑が丘と４館あり、これから中央館の工事が始まります。八千代市の図書館員の皆さんは熱心で、設計の時に多くの打ち合わせを行いました。中央館ができれば当然、市民の利用行動は変わるでしょう。折角なので、この機に既存各館の利用者層の変化を予測し、現在抱えている問題点を改善する案を考える試みをしました。手はじめに、子どもの声がうるさいというクレームの多い、勝田台図書館を検討対象としました。

設計演習として手ごろでもあるし、学生の新鮮な意見も聞いてみましょうと了解を頂いた上で、大学の授業でも取り上げています。これまで３期行い、図書館を学ぶ人は誰でもスケッチ図面を描けると確信するようになりました。体系を押えつつ個々の細目まで思い描く図書館学は、建築の設計手法に共通

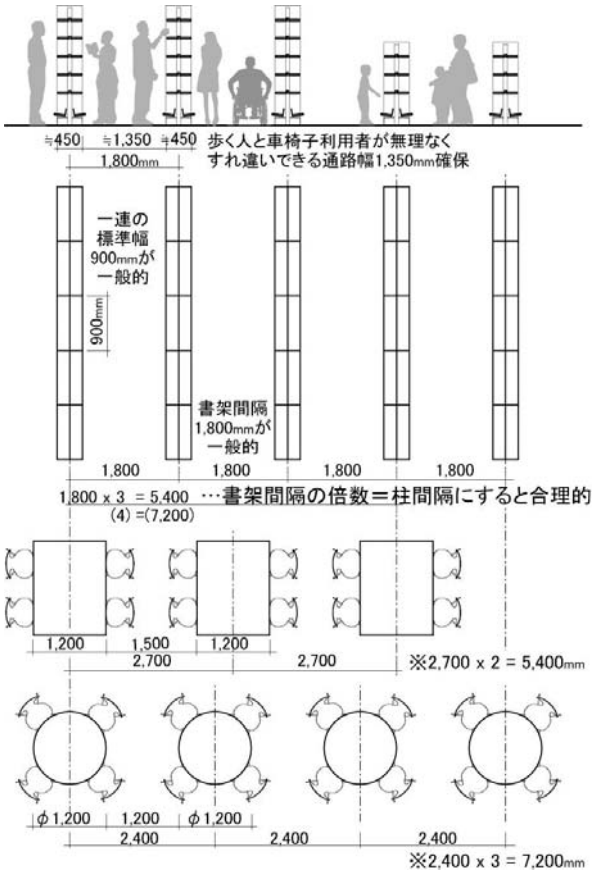
すると想像しています。ただし、基本ポイントを押えつつ、４回の授業を通して自らの問題意識を高めたうえで５回目に絵を描いてもらいます。

家具配置を描く一般的な手順は、前提を把握することから始めます。入口はどこか。逆に奥はどこか。階段、トイレ、窓はどこか…。

次に、重要なスペースから落とし込んでみます。第１にサービスデスク（貸出、返却、案内、レファレンス）。第２に資料配置について。何を入口近くに置くか、どの分野をサービスデスク近くに置くかは、どのようなサービスをしたいかに直結するはずです。第３に意識すべき資料の関係性。一般書と児童書、一般書と郷土・参考図書、児童書と新聞コーナー…。一例を挙げると、子どもの声がうるさいというクレームは、新聞を利用している年配の男性から出てくることが多い。新聞・雑誌コーナーが入口近くにある図書館は多いですね。開館前にも新聞を読める図書館の場合にはエントランスホールの一角にあったりします。一方、児童のスペースもたいてい入口近くにありますから、ゆっくり新聞を読もうとしている男の年配利用者の前を、子どもたちがキャッキャッしながら行き来する。教育がなっとらんと言いたくなる年配利用者の気持ちもわかりますが、叱られたお子さんはもとより若い母親は委縮してしまいますね。お互いに不幸なクレームの主因が建築にあることに気付けるかどうか。原因がわかれば改善もできるわけですが、設計する際、始めからそうならないように、児童開架と新聞コーナーの関係性など重点項目として配慮していきます。

それから基本データとして、書架間隔は（絶対値はないものの）まずは 1.8mを標準として捉えてみること。１連の長さも 90ｃｍ。実際に縦横とも基本モジュール（寸法体系）を 90ｃｍとする図書館は多い。書架と書架の狭間の寸法は、1.8mから書架幅約 45ｃｍを引いた 1.35m。車椅子利用者と健常者がスムーズにすれ違える必要寸法だと言われています。

次に座席レイアウト。奥行 1.2mあればテーブルに合い向かいに座ってもそれほど気にならなくなります。背中合わせで座る場合は 1.5mの間隔が必要。そうすると、1.2m＋1.5m＝2.7mが角テーブルの基本寸法になります。2.7mは 90ｃｍのちょうど３倍です。丸テーブルの場合は少しコンパクトで 2.4m。丸テーブル４組目と書架５列目が同じ 7.2mになります。このような合理的な寸法体系が、限られた面積の中でより多くの書架や席を可能にします。このような基礎知識を踏まえたうえで＜図１＞、全員が設計をしてみるという授業です。もちろんこの寸法に限定せず、多彩なアイデアを歓迎します。



＜図1＞合理的なモジュール（寸法体系）の一例

さて皆さん、一緒に勝田台の図書館をよりよく改修する方法を考えてください。現状の図書館員のサービスレベルと熱意は高いので利用数は高いのですが、いかんせんハードが古く狭くて、ソフトに釣り合っていません。

現状をご説明します。ホールのある複合施設の一部で、全体のエントランスホールに面して、図書館の入口があります。子どもの声がうるさいというのは、このエントランスホールが特に騒がしくなる曜日と時間帯があり、しかも図書館に入ってすぐ吹抜けとなっているので響き渡るという、建築面に大きな原因があります。

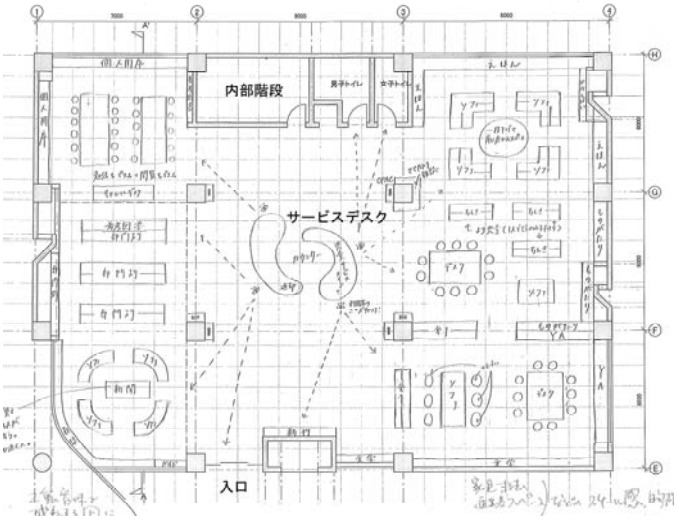
その吹き抜け部分に雑誌コーナー、並んでちしき、ものがたり、窓際にえほんのコーナーがあります。中央奥、２階事務室への内部階段を背後にサービス

デスク。新聞架はその目の前にあり、利用者は館内の思い思いのソファや椅子に散って新聞を広げています。少しでも席を確保するために、書架と書架の間に並行して長いソファが置いてありますが、時に図書館側の意図と違う座り方をする利用者もいて、そうなるとその前の書架の本は取りにくいという状態が発生してしまいます<写真５>。

また４席テーブルの奥の窓下書架に郷土・参考図書があるのですが、デスクの横の床に鞄を置く利用者もいて、行きづらいので使えない<写真６>。狭い館内にもかかわらず利用が多いだけに、どうしてもこういう現象は起きてしまうわけです。それを踏まえ、郷土資料の多くは中央館に期待できるとすれば、カウンター席に変えて、８席程度ここで増やす改善案も考えられます。

<写真5，6>上：書架間通路の狭い側に腰掛ける利用者もいる（奥の 2 人）。下：デスク横に荷物を置かれると窓下書架へは行きづらくなる。設計上は想定「内」の利用と捉えたい

また、利用者特性として、成人男性はフットワークよく、割と遠くまで出かけていく傾向があります。一般的な利用圏域は 1.5ｋｍ～３ｋｍまでと言われますが、同じ日本図書館協会施設委員会委員の中井孝幸先生の調査によると、車を持っている男性は８ｋｍくらいまでは出かけていくようです。そういう人たちは利用者カードをつくらない、館外貸出しない利用が多く、統計に載ってこないのですが、中高年男性は意外と図書館を利用している。よって、中央館利用にシフトする割合は、中高年男性が最も高いと予想できます。そのような前提にたち、勝田台図書館改修案を学生たちが提案してくれました。

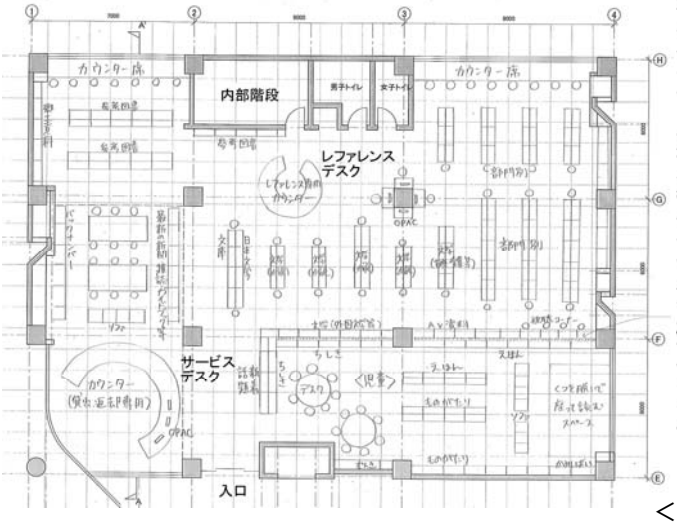


<図2>H24 秋期・早稲田文学部（社会学）3年Yさん作品

去年秋期の授業にて。30 分基本条件をおさらいした後、60 分間ほどで 40 人全員が描いてくれた中で、触発を受けた作品の一つ<図２>。親子連れ、勉強したい学生、遠出しにくいお年寄りたちを主要な利用者に見込んだ上で、サービスデスクを真ん中に置き、左は静かに利用できるスペース、右は親子が使いやすいスペースとに分けています。デスクの前後は何も置いていません。本は確かに減りますが考え方を重視します。この空白スペースは初めからつくり込んでほしくない。自分で工夫していく。ブックトラックやテーブルを出して、朝市みたいな感じで、毎日毎日何かを仕掛けたいと…。こういうアイデアが出てくるのです。人の成長に応じて使い込む場所が移る、入ってすぐの場がつくり込まれていく、二重の意味で成長する図書館といえます。

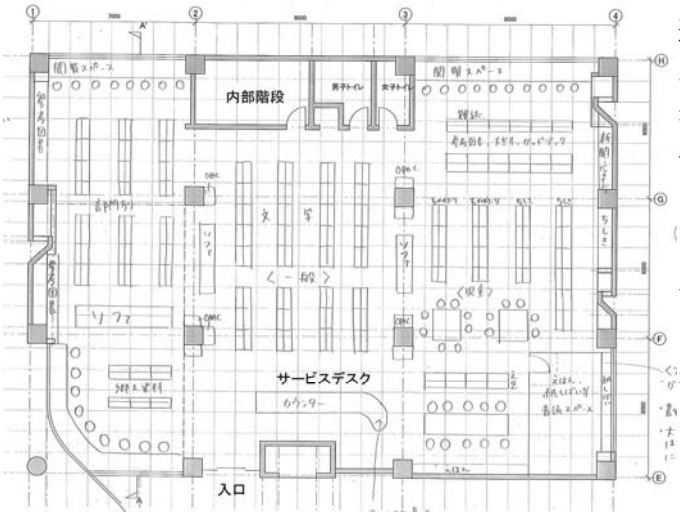
次に、これは今年春期の学生。一番最初に提出してきたにもかかわらず完成度の高い作品<図３>。サービスデスクは貸出、返却用を入口近くに置く。そして、レファレンスデスクを中央奥に、２つに分けています。入ってすぐ右側に、児童開架エリアを

まとめています。手前からちしき、ものがたり、えほん、靴を脱いで読むスペース。一般開架エリアの中央部に文学、奥に部門別があります。左側に手前から雑誌、新聞、奥に参考図書があって、レファレンスデスクにつなげている。入念に発展させれば、実現できそうな構成です。



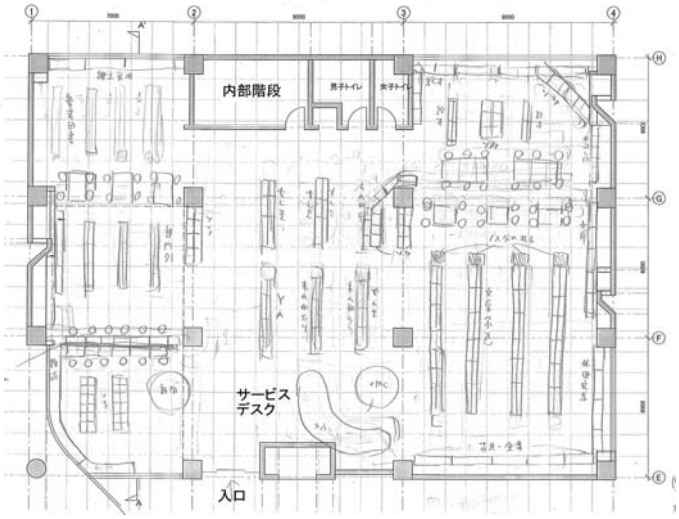
＜図3＞H25 春期・早稲田大学文化構想学部（文芸・ジャーナリズム）2年Tさん作品

次に、サービスデスクを入口近くに置いた案のバリエーションについて。この学生は児童開架をサービスデスクの右側に広く確保しています＜図４＞。その窓側に雑誌、ガイドブックなど。中央部に文学が隣接するようにして、子どもと一緒の保護者も安心して過ごせる環境を重視しています。調べ学習で使うことも考慮して入口近くに郷土資料を置き、窓に面したカウンターデスクを多く確保しています。



＜図4＞H25 春期・早稲田大学文化構想学部（社会構築論系）4年Tさん作品

この案＜図５＞は、文学を児童開架のスペースに組み込んでしまっているのですが、この規模であればこれもあり得るのではないでしょうか。小さな子どもを連れたお母さん方にとって使いやすいようにとの考え方です。



＜図5＞H25 春期・早稲田文学部（日本文学）2年Yさん作品

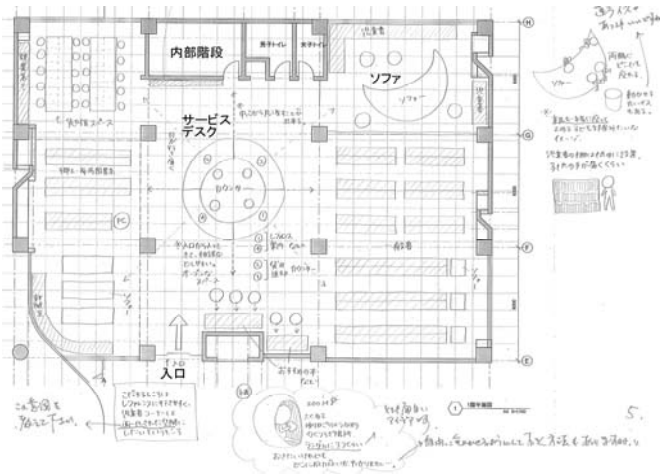
それから＜文学部（社会学）２年Ｚさん＞の案。同じような位置にサービスデスクがあり、書架を真ん中のゾーンに横長に配置して、四隅に人のためのスペースを配置していく考え方です。ダイヤグラムで明快に表現できる構成で、本の分野に応じて、四隅に静かな大人向けとか、新聞・雑誌、主に中高生、子どもを想定したデスクと椅子をつくり込んでいます。立体的な空間のイメージが出来ている学生です。

＜教育学部（国文）３年Ｔさん＞の案。柱間ごとにガラススクリーンで仕切り、１か所ずつ雰囲気の違うスペースをつくり込む考え方です。モバイル中心に調べたり、グループで学びあったりしやすい図書館にしたいという、私には発想できなかった案です。その他、同じサービスデスクの位置でも、さまざまなバリエーションがありました。

＜人間科学部（環境学）２年Ｉさん＞の案。児童・一般という枠にとらわれず、真ん中に、大人が読んでも面白そうなちしきや子どもにも使わせたい参考・郷土資料などを置いています。（各図面省略）

この作品＜図６＞は、前期作品の図２の影響を受けていますが、先ほどの大人と子どもの眼の高さを近づける座のしつらえの案を盛り込んでいます。月型のソファの周りに、衛星のように座の高さの違う

スツールを散りばめるというアイデア。ゆりかごのような籠れるしつらえも点在させるアイデアも余白に描きこんであります。保育園を１週間調査した学生の話によると、良い本があることもさることながら、どこかに本を持って籠れる小さなスペースがあると、読書する子は増えるようです。その話を受けてのアイデアです。



＜図6＞H25 春期・早稲田文学部（教育学）２年Kさん作品

こうした学生のたった１時間の手づくり作品を見ていただいて、私が申し上げたいのは、「魅力的な空間に仕立て上げる」ためには、つまるところ、１人ひとりがデザイン感覚を高めて、みずから手を動かしてつくり込むのが最も確実なのではないかということです。誰かに委ねるという方法もあるでしょうが、図書館の皆さん共通のテーマとしてデザイン感覚を高めていく方が楽しく励みにもなるのではないでしょうか。小さな変化でもよく、まずは実行してみて、自分は手を動かせる、自分でもできるという実感を持つことが大事だと思います。

実は去年、初めてこの演習を実施して、１時間のうち30分経った時点では、ほとんどの学生は描けていませんでした。ちょっとだけ描いている学生が大半で、逆に苦手意識を与えてしまったかと心配になってきたのですが、いざ終わってみると、それぞれ結構描けていました。集中するとできるのだと思います。先ほど申し上げたように、図書館員は分類学に関する知見に基づき、全体と個の関係を縦横に捉える仕事をされているので、設計の組み立て方に共通点を見出しやすいのでは。習うより慣れろです。

さて、自分のデザイン感覚を高める上で近道なのは、日本人なら日本人、中国人なら中国人、韓国人なら韓国人として受け継いで奥底に秘めている感覚を引き出すことではないかと思っています。その際、他国のことを知ることも自分のＤＮＡを再認識する上で有効ですし、実際多くの先人たちの事例がそれを物語っています。その一例として、絵画の分野における日本とヨーロッパの交流、影響しあってきた歴史の一端を紹介します。

例えばディック・ブルーナ。日本人でもミッフィーが好きな人は大勢いますね。一つにはブルーナの作品に日本人になじみやすい要素があるからではないでしょうか。ブルーナは色を限定するとか、必ず正面を向いて子どもと向き合うなど、自らの表現に制約を課したうえで無限の作品を生み出しています。それは、俳句や和歌など、ある制約あるいは余分なものを削いだ中でどれだけの思いを込められるかという日本の芸術作法と良く似ています。

オランダ人のブルーナが最も影響を受けたのは、フランスのアンリ・マティス。この作品は「ルーマニアのブラウス」で、赤い単純な背景に花柄の入った白いブラウスの若い女性の絵です。一気に描かれたようにも見えますが、実は５カ月かけて制作されています。当初案にあった花柄のカーテンやソファが省略され洗練されていく過程が記録として残っています。

そのマティスが大きな影響を受けた１人に、オランダ人でフランスでの活動の長いゴッホがいて、次の絵はゴッホが 1890 年自殺する１ヶ月前に描いた「医師ガシェの肖像」です。オレンジ色のテーブルに肘を付いた人物の背景は、ちょっとわかりにくいかもしれませんが、空と山をブルーで単純に描いています。その省略の仕方とか、オレンジとブルーを対比させる補色の効果などは、実は日本の美術から多くを学んだ成果と言われています。

歌川広重「亀戸梅屋舗」の、地面を緑に空を赤で対比させる鮮やかな補色効果や、梅の木の大胆なカットの仕方、誇張や崩しや省略など自在に画面を組み立てる絵画的効果など、19 世紀後半のヨーロッパに衝撃を与えたわけですが、ゴッホは広重を模写しながらも完全な模倣をしているわけではない。横に短冊状に他の絵を入れるとか、最終的には自分の内に秘めたるヨーロッパ人としての感覚と融合させて、

ゴッホ独自の境地に至っています。

一方、ゴッホに影響を受けた大勢の日本人の１人、佐伯祐三はヨーロッパでの４年間に全画業があるといわれ、２年目に一旦日本に戻りますが、病をおしてパリに戻り 30 歳で亡くなる。この絵は最晩年の絵です。ヨーロッパでなければ絵がかけないと言いながらも、亡くなる前の絵には日本人としての感性がにじみ出ています。変わらない石造りの街に貼ったばかりのポスター、逆に朽ちているようなうたかたの広告もあって、自分の命のはかなさを投影しているのでしょうか、線で表現された画面に日本人的な感覚が出ています。例えば、川端康成が長く手元においていた浦上玉堂の国宝「凍雲篩雪図」。この線の表現とすごく似ています。

というように、ヨーロッパでなければ描けないといった佐伯祐三でさえ、最終的には日本人の感性が色濃く出ているところに、内に秘めたる母国の感覚の強さを感じます。

このような感性の交流に対して、美術評論家の高階秀爾は「真の国際性とは、それぞれの国の民族的なものの裏づけがなければ成り立ちがたいものである」と看破しています。

先日イタリアのデザイナーの講演を聴講しましたが、自分の原点として古代ギリシャやローマから何を受け継いでいるかというところから話を切り出す所にも、１人ひとりが内に秘めたるものの決定的な潜在力を感じました。そして、それを日常の中で紡ぎ出す努力が、最も確実な感性を磨いていく方法だと思います。

最も良くないのは、自分はセンスがないと決めつけてしまうこと。まだ若い学生でもそう言い切ってしまう人がいます。しかし 0 点もなければ 100 点もないはずです。もっと素直に、何かにいいなと反応した時の自分の感覚を信じ、大切に膨らませていくべきです。その方が人生、楽しくなるはずですから。

自分のデザイン感覚を高めるために、美術館に行くときだけでなく、日常の中で意識すべきだという例として、授業では私が直前１～２週間の中で、実際にいいなと感じたグッドデザインを紹介しています。次週何を紹介するかは当然のことながら出会ってないのでわかりません。例えば＜写真７＞、新宿駅のＪＲと京王線をつなぐコンコースは、統一したポスターの貼り方でメッセージを発信するストリートになっています。たまたま通った時に、サッカーの本田圭祐を起用した、背景の色だけを変化させた「ミンティア」のポスターが連続して貼ってありました。「俺は持ってる」のキャッチコピーがひときわ大きい。通りながらもよく見ると、その一部に手書き文字が添えてあり、「俺はたまたま持ってる」「俺はちゃんと持ってる」とか「俺は何となく持ってる」などと書いてありました。これは面白いデザインだなと思いつつ２、３枚目に気付く、ひょっとして落書きかなと。こういう落書きであればありだなと思いながら、とにかくこのポスターの良さを味わうわけです。このコピーが「俺は持っている」だとしたら、たった１字入るだけでインパクトはなくなるだろうな、それでいて明朝体だからいいのだろう、これがゴシック体では本田の顔のディテールに対し強過ぎてしまうなど…。

＜写真7＞新宿駅で見かけた「ミンティア」のポスター。背景の色の違いは商品の豊富な品ぞろえを表現している…。その日より、私のカバンの中にはいつも「ミンティア」がある

そういうことを考えているうちに、総武線に上がる階段の横にパナソニックのコンパクトカメラ「ＬＵＭＩＸ」の広告が目に飛び込んできました。綾瀬はるかの背景は赤と黒の２種類で、対に貼ってありました。モデルを半身で大写しにし、大きなキャッチコピーを添えるグラフィックのつくり方はほぼ同じです。違いは大文字の細さです。本田のポスターに注目した直後に出会って、これもありだなと思いました。通常、字が大きくなれば、それにつれて太字にしがちですね、これは多分、カメラの 10 倍ズームがウリですから、もとは小さい字を拡大しているという感じを出すためにあえて細い字にしたのかな、

そして拡大しても美しい綾瀬はるか…、商品の性能をビジュアルに表現できていると解釈しました。

このように日常の中でデザイン感覚を研ぎ澄ませるきっかけはどこにでもあります。私自身がいいなと感じたグッドデザインを毎回の授業の冒頭に見せることで、学生たちにデザイン感覚を育むうえでの日常の大切さを訴えています。私が率先して示している具体例としてもう一つ、毎回レジュメのフォントを変えて、同じようなレイアウトでもいかに印象が変わるかを実感できるようにしています。日常レポートをパソコンでつくる時にも、ノートを手で書く時でさえも、デザインを意識し、感覚を磨く機会にすべきだと皆さんにも呼びかけたいと思います。

ここから本題に入ります。施設・設備（建築・インテリア）を使いこなす視点を持つことについて。図書館を構成する３要素は、①図書館職員　②図書館資料　③施設・設備といわれていますが、良い図書館であるための貢献度はそれぞれ何％ぐらいかという話は、①図書館職員の重要性を説くいい教材として、紹介されることが多いと思います。①図書館職員 75％、②図書館資料 20％に対し、③施設・設備は５％。この理論の出所はアメリカの専門家なのでしょうが、私の立場からすると、③施設・設備の５％は、もう少し上積みしていただけませんかと言いたくなりますね。消費税でさえ８～10％になるわけですから。そうするとその分、①図書館職員が 70％になるのか、②図書館資料が 15％になるのかという駆け引きになってしまいますが、このような議論で注意すべきは、数字の魔術にかからないこと。数字で説明するのは明快なだけに罠があります。つまり合計が 100％でなければいけない固定観念に縛られると綱引き合戦に陥ってしまうのですが、仮にこの③施設・設備が 10％、20％になると、①図書館職員は働きやすいし、②図書館資料はより魅力的に見える。つまり合計 100％ではなく、③施設・設備（建築・インテリア）を使いこなして、全体評価を 150％でも 200％でも引き上げていく視点が望ましいのではないかと思います。往々にして建築・インテリアは完成してしまったら、もう変更できない、そのまま使わなければいけないと思い込んでしまいがちですが、そういうことはありません。幾らでも使い込めるし、変えて良くしていけるという視点が、ぜひとも必要ではないかと思います。

それでは、よいソフトがよりよいハードをつくっていく事例を紹介したいと思います。

＜写真８＞新潟市立中央図書館内フリースペースから「ＢＢカフェ」の売り場をみる。奥にレストランがある（開館当初）。右端の木製飾り棚が３週間で外された

「新潟市立中央図書館」のエントランスにフリースペースが連続し、その奥にＢＢカフェがあります。ここで販売しているパンは内部のキッチンで焼いています。そのパンを買いに来るだけの人もいますし、子どもを連れたお母さん方のコミュニケーションの場にもなっています。たまたまこのレストランのオーナーで、テナント内装もご自身でデザインされた掛川さんがランチに来られました。「いや、休みだから、ちょっとランチに寄っただけ」といいながらも、きっとスタッフの動きなどを細かくチェックされるのだろうと思って近くの席にいたのですが、悠然と本を読み始めて、利用者になりきっておられました。オーナーとして時々来て、あれこれ気のついたことを指摘して足早に帰るのではなくて、利用者になり切ることによって、例えば足元がだんだん冷えてくるとか、厨房から聞こえてくる音が耳ざわりだとか、利用者になってみなければわからないことがあるにちがいない。後で伺ってみたら、それは当然ですみたいなことをおっしゃっていました。

＜写真８＞はフリースペースからパンなどを販売するコーナーをみた開館時点の写真です。さらに奥のレストランとの境にきれいな飾り棚があります。これがたった３週間で取り外されました。レストランがもっとストレートに見えた方がお客様は入りやすいと掛川さんが即断されたのだと思います。民間

だから、自分のものだから簡単にできることなのかもしれませんが、このような利用者目線での検証や改善は、図書館でも積極的に行うべきだと思います。

例えば、図書館の職員の皆さんが毎日出入りする通用口と、利用者の入口は一般的に別です。たまに利用者入口から入って自分の図書館がどう見えるかをチェックする必要があります。商業施設では、そうした商品の見え方チェックを毎日行っています。自分の商品が利用者の眼にいかに魅力的に映るかは、最も基本となる日常の心得のようです。

＜写真9＞高知県立図書館。イーゼル型の展示案内板がわかりやすく、人を呼び込んでいた。私もそのひとり

「高知県立図書館」に、初めて伺ったのは偶然でした。高知市内に用事があった時、その年の大河ドラマは「功名が辻」でしたので高知城へ行ってみようと。降りてきて、たまたまイーゼル型の案内板が目に入りました。図書館で「食」の展示行ってますというメッセージ＜写真９＞。

入ってみましたらすごくいい。本や各種展示がとても魅力的に見えました。写真撮影の許可をいただくべく館長にお会いしたら、以前浦安にいらした丸地さんでした。建築は古く段差だらけでバリアフリーでないなどハンディがあるにもかかわらず、利用者の視点でみて、これだけ魅力的な図書館ができるものなのかと。未だにそのギャップを越える教材はないので、改めて丸地さんにご了解をいただきましたが、今は笠間の岩間図書館で頑張っておられます。

入ってすぐ左の展示コーナーで、「食」をテーマに県の外部機関と連携した展示を行っていました。図書館としては、貸出しできますとメッセージ付で、手に取りたくなる本をさりげなく並べていました。

子ども読書室の前にはちょうど今ごろの七夕の飾りつけがあって、2 階の一般開架に上がる階段の踊り場にも、同じような七夕の飾りつけ。それは外からちょうどショーウインドのように見える、視覚効果の高い演出でした。

2 階に上がると正面に、音楽と美術をテーマにした展示が出迎えてくれる演出です。

＜写真10、11＞高知県立図書館。上：県立美術館で開催中の展覧会の紹介。下：地震コーナー。ともに複数のメディアを展示して多様なアプローチがあることを示唆している

＜写真 10＞美術をテーマにしたパネルには、ちょうど県立美術館で開催中の「造形集団海洋堂の軌跡」展を紹介する精巧なフィギュアが並び、メッセージには「高知県立美術館に行こう！」とありました。新聞の切り抜きや関連本など多彩で立体感のある演出は、館内各所にきめ細かく展開されていました。

＜写真 11＞地震コーナーもその一つで、本を中心に、かつての被害写真、高知県内で出されている関連パンフレット、新聞の切り抜き、映像資料などにポップが添えられ、学び、知るためのアプローチが多様であることを利用者に印象付けていました。

「語り継ぎたい土佐の人物傳」のコーナーでは、寺田寅彦、２週間後には中岡慎太郎を紹介していました。ここでも手づくりの展示と本の組み合わせで、土佐ですからネタは尽きないテーマ設定なのでしょうが、展示を通して図書館員の心意気が伝わってきました。県立図書館でここまで行うのか、おそらく市町村支援の意味としては、多彩な利用者サービスの実践を示すことが大きいのではないかと思われました。その横には、「仕事に生きる本」のコーナー。きめ細かくメッセージが添えてあります。

「今月のお勧め本」にも同じくお薦め寸評がついていて、単なる新刊紹介では終わっていません。

閲覧室の一角にジョブコーナーを併設。ＩＴ関係の本、資格・就職の本、県内で発行されている各種パンフレットなど、多様な資料を提供していました。

ただし、1 点指摘させていただくとすれば、展示架や展示ケース、ラック、デスク、椅子などの家具備品のバラバラ感は否めません。これは日本全国どこでも時間の経過した公共建築はほとんどすべてそうです。昔の家具備品に新たに購入したものが加われば、本来は豊かになるはずなのに、全くデザインの違うものが隣り合わせに並ぶと、引き立てあうことなく雑然と、逆にプアーな印象まで醸し出してしまいます。

これは供給側にも問題があり、売れ行きが悪いとすぐに廃番となって同じデザインのものが手に入らない。ものつくり大国としての大きな課題が横たわっています。

日本人は、美的感覚が鋭いものの、器用にどのような環境でも対応できてしまう側面も併せ持っているので、割と雑然としていても過ごせるところがあります。物の豊かな時代であるから、なおのことそうなのかもしれません。しかし、時代の流れは、「物の豊かさ」から「心の豊かさ」へと緩やかにシフトしています。同じ値段でもデザインの良しあしで売れ行きは全く違ってきます。デザインの質の高いものは売れます。本も、特に日本の小説は本屋でも図書館の棚の風景も、昔より今の方が美しく見えるように思いますがいかがでしょうか。電子書籍にシフトするから、装幀の質を落とすとはならないのではないでしょうか。

図書館としても、よりよいデザイン環境をめざすべきです。これまで棚やデスクを追加購入される場合は、カタログで必要な寸法や収容力のものを選び、カタログの中だけで色を決めて発注してしまうことも多かったのではないでしょうか。それで現場に置いてみたら既存の家具備品と全くそぐわない。投資したのにインテリアの調和を乱す原因をつくってしまう…。そうではなく、実際に置く場所に立って、既存のインテリアの要素と調和するかどうかをよく吟味するだけで、状況は相当変わってくるはずです。

そのいい事例を紹介します。タイ、バンコクにある「サミティヴェート・スクムヴィット病院」です。バンコクにはアメリカやアラブ諸国などから患者を集める、安く優れた先端医療を提供する病院が３つ４つあり、そのうちの１つです。

たまたまタイに行った時に、いい病院があるからと前勉強もなしに訪れました。新しく見えたので、「完成して数年ですか」と尋ねたら、「いや、もう 28 年経ちます」と胸を張った答えが返ってきて驚きました。

＜写真１２＞サミティヴェート・スクムヴィット病院。医事会計、薬局のとなりにカフェがあり、待合は明るい雰囲気

例えば＜写真 12＞、エントランスホールに続く医事会計と薬局の横にカフェテリアがあります。病院に来て沈みがちな患者さんの心を少しでも和らげたい配慮だろうと感心したのですが、よく見ると後から増設された痕跡があります。しかし一瞥では初めからあったように馴染んでいます。

その２年後、今から４年前ですが、病院のホスピタリティを学ぶ調査目的で再訪しました。その２年間でも変わっていたところが随所にあって、このカフェテリアも同じ店なのですが、看板がより明るい

印象のものに取り替えられていました。改修前後の写真を比べると、商品陳列もよりにぎやかでおいしそうにみえ、患者さんへの語りかけを強めていることがわかります。

日本人のための案内ブースも、前はガラススクリーンで囲われ、それはそれでモダンなデザインでしたが、透け透け過ぎたのか、見え隠れさせつつ、落ち着いて相談しやすいように、きれいなプランターボックスをデザインしたブースに替わっていました。

暑い国ですから、ミネラルウォーターをご自由にどうぞと、ラウンジソファの横に置いていたのは同じ。案内カウンターから目の届く所で、私たちが見ているから安心ですよというアイコンタクトを添えながら提供しています。そのカウンターの上部の壁に、以前はなかった世界各国の時差を示す時計が設置され、国際的な病院であることをアピールしていました。

エントランスに後から設置されたＡＴＭや自動受付機も、ただぽつんと置いてあるのではなく、きちんとデザインされたフレームに納まっています。

＜写真13＞サミティヴェート・スクムヴィット病院。中央から少し離れた外来待合に新設されていたコーヒーショップ

少し離れた外来待合では以前はワゴンサービスを行っていましたが、美しい常設のコーヒーショップが出来ていて、よりきめ細かなサービス、くつろげる環境がグレードアップしていました＜写真 13＞。

このようなインテリアの見直しを重ね、病院の魅力を向上させ、少しでも患者さんの評価を高めて成績につなげようとする、大規模病院間の競争原理がいい方向に働いています。それにしても、決して違和感がなく、全体が調和するようにデザイン感覚が発揮されています。いわゆるファシリティ・マネージメント（施設・環境を経営戦略的視点から総合的かつ統括的に企画、管理、活用する経営活動）の良質な参考例です。

次は、日本の図書館の例。岡田新一設計事務所で私が担当させていただいた「新潟市立中央図書館」の展示コーナー。

＜写真14、15＞新潟市立中央図書館。一般と児童開架の間にある展示コーナー。

これは、一般開架とこどもとしょかんをつなぐ展示コーナーで、どちらにも適したテーマ設定が可能です。

＜写真 14＞は、オープン直後の「ここがみどころ」シリーズ、「味どころ」をテーマにした展示。２週間前は「見どころ」でした。米どころ越後の一升瓶や米俵が並んでいる、ワクワクするような展示の仕方をしていました。様々な企画を実現できるように、＜写真 15＞装置としては、まず壁面全体を掲示板にしています。そこに書架と同じ棚板を取り付けることができるように、その棚板を逆に取り付けると表紙を展示できる傾斜棚になる、棚板に透明アクリル製ケースを被せれば、ものを保護できる展示ケースに早変わりするなど、数種のパーツを用意しました。使用しない時には、下の戸棚の中に保管しておきま

す。手前のスペースには独立型で動かせる展示ケースを用意しています。

これらは図書館員の皆さんと、どのような展示を企画されるかを打ち合わせしながら、必要なパーツを工夫したものです。エントランスホール間のガラス窓２ｍを加え、約 13m展示壁の長さがありますので、見ごたえがあります。

＜写真16＞新潟市立中央図書館。一般と児童開架の間にある展示コーナー。未来のマンガ家たち展、優秀作品展示

新潟市は水島新司や高橋留美子の出身地なので、漫画の専門学校があり、その学生たちの格好の発表の場にもなっています＜写真 16＞。出展数の多い展覧会の時はエントランスホールで行うなど、図書館を使いこなしています。

実は２日前にも新潟市に参りました。ちょうど今、展示しているのは、ダウン症の子を持つ家族主催の「ようこそわたしのところへ」－ダウン症児と歩む家族のストーリー。わが子のポートレートにそれぞれ愛情あふれるメッセージが添えられています。図書館でぜひとも開催したいという願いが適った展示です。図書館として関連する何冊かをここで紹介しています。加えて館内ではどこに関連する本があるかメッセージも添えてあります。

それから、去年の 12 月に伺った時に気付いたこと。同じく一般開架とこどもとしょかんの間にあるテーマ展示架。当初は多目的でしたが子育て応援コーナー常設になり、さらに壁面側にあった外国語の絵本のコーナーも、子育て応援に関する書架＋展示に変わっていました。非常にニーズが高いようです。

「新潟市立中央図書館」では、いろいろな試行が繰り返されていますが、魅力をつくる上で重要なのは、図書館本来のノウハウに加えて、やはりデザイン感覚だと痛感しています。ポスターにしろ、チラシにしろ、ただ書いてあればいいというのではなくて、「伝える」ためには、どのように表現すればいいか、より美しく、よりメッセージ性を高める視点で、考え抜いていくべきなのではないかと思います。

＜写真17＞新潟市立中央図書館。開館当初の一般書架

＜写真 17＞は、オープン直後の一般開架、３類経済、財政周辺の書架です。開架収容 35 万冊がいきなり揃うわけではないので、本が少なく見えないように、目の高さの４、５段目に平置きできるスチール製展示台を組み込みました。展示台は１連の長さがあるものと１冊用の２種類あります。まもなく開館６年になり蔵書も増えてきました。今は４段目のみ平置きになっていますが、きれいに魅力的に見えるので、今後もそのままのスタイルで開架数を調整されるようです。＜写真 18＞ＹＡの書架にはメッセージが至るところに添えられています。手書きの手づくり感がいいですね。

＜写真18＞新潟市立中央図書館。YA 書架

想定外だったのは、平置き用のスチール製展示台がサインのベースとしても機能していること。本の代わりにメッセージを置いています。このような使われ方は想定していませんでしたが、工夫するというのはこういうことですね。自由な発想で使い倒し

ていただく所から、私も学ぶことが多くあります。

これは、こどもとしょかんの子ども用の新聞・雑誌架です。最新号は透明アクリル製の受け台に乗せてきれいに見えるように。バックナンバーや新聞は背表紙がわかりやすいように、壁面書架のバリエーションとしてデザインしています。

館内各所のメッセージも、パソコンでつくったものに手書きが添えてあり、何かほのぼのとしてきます。桜の季節に壁面パネルに花びらがさりげなく貼ってあったりします。このように 35 万冊開架の巨大図書館ではありますが、きめ細かく使い込んでいただいています。

＜写真19＞日進市立図書館。パンフレット・チラシ架

愛知県日進市立図書館のエントランスホールにポスター用掲示板およびパンフレット、チラシ架を用意しました＜写真 19＞。この種の資料はどうしても乱雑になりやすいので、ラックは透明でなく、やや緑がかったガラス色のアクリルで作っています。

続けて、掲示・展示のシステムづくりについて。

ある大学の新校舎を設計するに当たって、既存の校舎を調査しました。学生課とかキャリアセンターとか各課の貼り方には統一感がなく、ばらばらでした。空いているところに貼り足していく運用の場合、わかりにくくなって、休校などのお知らせなど学生側が求める情報以外の、呼びかけポスターは見向きもしなくなります。

伝達効果が見られないと、ますます掲示板や展示架を増やしていくジレンマに陥ります。その際、先ほど話題にした設備投資が悪い方向に行きやすいことに注意。＜写真 20＞は設備投資するにつれてパンフレット架が混在し、好感度を下げてしまっている例です。これは決して他山の石ではなく、どのような図書館でもあり得る話だと思います。

＜写真20＞3種のパンフレット架の混在。お互いに違和感を放ち、好感度の低い空間になってしまう

好ましい事例として、ある映画館が参考になります＜写真 21＞。メジャーでない良質の映画を上映する映画館なのでリピーター勝負です。繰り返し来てもらえるように、いかに快適な時間と空間を提供するか、いかに魅力的に次の案内をするか、その真剣さがインテリアに表われています。

＜写真21＞映画館のホワイエ。掲示板とチラシ架は運営方法を決めた上でのデザインで魅力的

この掲示板とチラシ架を組み合わせた装置は、貼る、置くモノの寸法を決めた上で制作し、当初の方針に従ったうえで運用面での工夫を凝らしています。まさにハードとソフトが一体化した優れたデザインだと評価できます。掲示板は黒ベース。左半分は白系の用紙で貼り尽くし、右半分は舞台挨拶をした時の写真のみで、周囲に他のチラシなどをべたべた貼る野暮なことはしていません。白の世界と黒の世界の対比が美しい、すごく粋ですね。チラシもＢ５に統一されて整って見えます。

こういうセンスが求められるのではないでしょう

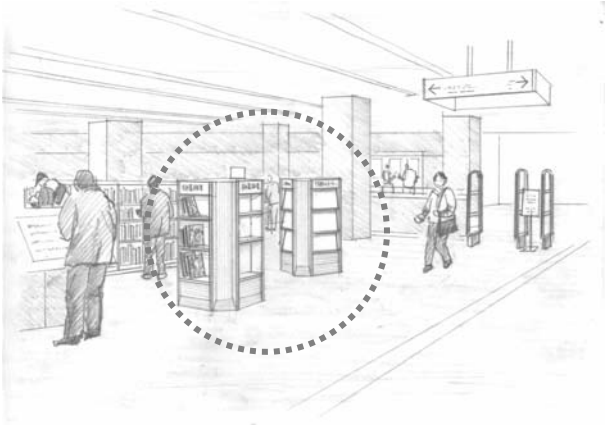
か。図書館でも日頃のデザイン感覚をこのように発揮されるといいと思います。

次の写真、上映の終わったチラシを壁に２段１列に詰めて貼るだけで、カラフルな帯ができ、映画館らしさを醸し出している、上手い手法です。

機械室の白い扉も掲示板に見立て、マグネットでポスターを貼っていますが､埋め尽くすのではなく、市松に貼って、それだけで空間をデザインしているようにみえます。手前の大き目のテーブルにはチラシを置き、そこに椅子を添えて、自由にお掛けになってご覧くださいというメッセージになっている。実際に座って見る人はあまりいないと思いますが、優しさを感じます。自分たちのために用意してくれているんだなという気配りはお客に伝わります。

次は､「図書館建築をつくる定石の再検証」について。一般的に有効と思われているノウハウが、すべての場面において定石たりうるのか検証してみたいと思います。ソフトとハードの関係性について、具体例を２つ取り上げます。昔から方々で呼びかけているテーマなのですが、少しずつアイデアを増やしています。

最初は､「入口周りの展示架で図書館らしさを演出する」ことの再検証です。表紙を見せて本にあふれた図書館らしさを演出する、多くの図書館で実施されていると思います。でも本当に魅力アップにつながっているでしょうか？



＜図7＞入ってすぐの木製展示架に本がないとしたら…

＜図７＞は、私の好きな図書館です。どこかわからないような絵にしていますが、いい図書館です。ただ気になったのは、入ってすぐの木製展示架に、いつ行っても本が並んでいない。木製の家具は存在感があるだけに、本が置いてないと木肌の背板が寂しさを強調し、図書館員がサボっているように見えてしまいます。何回か行っているうちに、いつも私は夕方行くものですから、ひょっとしたら、午前中は置いてあったのかもしれない。表紙がきれいで、それが目立てば目立つほど借りられる。借りられた後、本がなくなると、すごく寂しくみえて、にぎわいを演出する本来の目的とは逆の作用が働いてしまうのではないか、と思われてきました。

スウェーデン、マルメ市の図書館で見かけたきれいなデザインの展示架があります。写真では２冊置いてないですね。誰かが借りていったのでしょう。でも観察していると、ライブラリアンがすぐに来て補充していく。このように人手を掛けられる場合には導入していい家具ですが、日本では少ない人数でどれだけ努力できるかというところで勝負していますから、このような１冊ごとはっきり浮き立たせて魅せる展示架はうかつには採用できません。

同じマルメの図書館に、あるテーマの本を背表紙を上に向けて並べるワゴンセールみたいな展示架もありました。サインボードにそのテーマの代表選手のような本を掲げて、わかりやすくしてあります。これはありでしょうね。１冊２冊借りられても、寂しく見えません。どこかで採用してみたいと思いつつ、まだ実現したことはありません。皆さんいかがでしょうか。

日本でよく見かけるタイプに、横スリットのどこにでも受台を引っ掛けることができる展示架があります。そこに表紙を見せて１冊ずつ展示します。写真は朝早く撮ったものです。この場合も借りられた後どう見えるか。夕方近くはどうか。想像してみてください。本屋との違いは、何冊も平積みでき、下から玉ねぎの皮のように同じ本が出てくる手が使えないこと。本屋とはハンディがありますね。しかし本屋に寄り添うのではなく、基本的に１冊しかないことを図書館の特性と割り切って、図書館らしい表紙の魅せ方を考案するのが本道だと思います。

この問題の解決案を考えるきっかけとなったのは、立川市中央図書館で、いまは千葉経済大短期大学部教授の齊藤誠一先生にご案内いただいた時のことです。その時はまだこの図書館のレファレンスを担当されていました。展示架の前を通った際、先生が何

気にひょいと下の本を、表紙を見せるように上げたのです。なるほどと思いました。バックアップです。上２段は表紙を魅せる展示架、下１段に背表紙をみせる通常の置き方で類似本を置いておく。そうすれば図書館員は誰でも通りすがりに補充していけます。これは一つのアイデアだなと思いました。

我孫子市の図書館の設計中でしたので、早速、全部表紙を見せる棚だけでなく、差込み式も組み合わせた児童書架を提案しました。

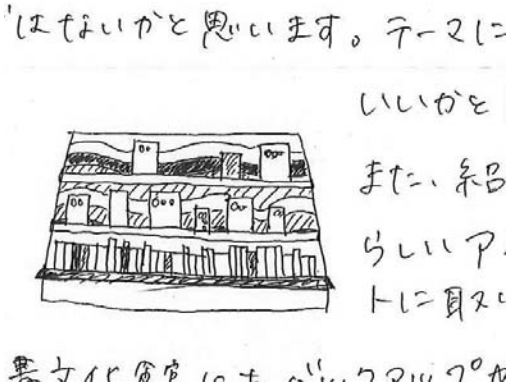
＜写真22＞本が少なくなっても寂しく見えない展示架

ふじしろ図書館では、展示架から本が減っていくのは本来好ましいことなので、本がなくなっても寂しく見えない展示架にチャレンジしました。緑がかった透明のアクリル製です＜写真 22＞。本がなくなっても、展示架がオブジェに見えるので、寂しく見えません。図書館員の手がすいたときにまとめて排架していただければよいタイプです。

同じ図書館の２階児童開架の導入部分に置いた、ウェルカムの役割を持つ展示架。館長が「子どもってウンチ君が好きなんですよね」とおっしゃるので、「ではウンチ君の展示架にしましょうか」と半分冗談で申し上げ、でも斜めになるのでやっぱりやめましょうと断念しかかったのですが、面白いからやろうということになり実現しました。これもオブジェに見えるので、本がなくても寂しく見えません。

ワゴン型の展示架は吉田町立図書館の時に初めてつくったものですが、動かせる展示架で、何もなければ荷物置台にもなるし、イベントの時の作業台にもなります。

このことを、今週火曜日の早稲田の授業で問題提起しました。展示架の本がなかったら利用者にはどう見える？　図書館員であるあなたはどうしますか？。終了間際 10 分のレポートで、多くの学生がいろいろなアイデアを寄せてくれました。



＜図8＞H25 春期・早稲田文学部（教育学）4 年Mさん答案。背景に模様、最下段にバックアップをおく展示架スケッチ

「よいハード（環境）というものは、何らかのメッセージ性を持っている」「入口近くの展示棚が木製である場合、そこに絵や写真を貼っておくのはどうかな」など。子どものスペースの展示架で、動物が見え隠れするイラストもありました。＜図８＞は背板にもっと抽象的なパターンが描かれていて、バックアップ用の最下段も持つ、リアリティのある展示架を正面からみたスケッチです。

このようなレポートを出張の行き帰りの新幹線や飛行機の中でわくわくしながら読んで、それぞれにコメントを書きこむのですが、上記の絵に刺激を受けた昨日、九州からの帰りに東京駅でフリーペーパーのラックを改めて良く見ましたら、背景の板に何らかのメッセージや絵が描いてあるのですね。なくなっても寂しく見えない工夫がすでになされていました。何度も何度も通り過ぎているコンコースなのですが、学生とのやり取りがあって初めてフリーペーパーのラックの工夫に気づきました。

先ほど申し上げた本屋とは違う魅力の出し方のヒントといえますが、私は今、雑誌架にこのアイデアを応用しようとしています。雑誌を取ったら、背後にきれいな色が見えて、雑誌が歯抜けになっても間が抜けない雑誌架を実現させたいと思っています。

「図書館建築をつくる定石の再検証」の事例の２つ目として、「入口まわりにあれば目立つから、みんなが見てくれる？本当にそうか？」。

例えば、貸出確認ゲートの横に壁のある図書館は

多いと思います。そこにポスターを貼るとか、チラシなどを置く活用事例は結構あります。ところが、利用者がちゃんと見てくれているかどうか。

＜図9＞貸出確認ゲートの横の展示に気付く人は少ない

貸出確認ゲートを通る時には視界がきゅっと狭まるので、ゲートと展示壁との距離があればあるほど、また展示壁の長さが短ければ短いほど、利用者の視界からは外れます＜図９＞。この絵のモデルの事例で観察したことがありますが、20 分間で１人も見ていきませんでした。せっかく図書館員が時間をかけてセッティングしたのに、利用者が立ち止まってくれないとしたらつまらないですね。時間を掛けて観察し、効果を検証する作業が必要だと思います。この絵のように、ほとんどの人が見てくれない実態がわかれば、例えば間にちょっとしたテーブルを置いて、チラシなどを並べておけば、それがまず目にとまります。そこで立ち止まれば、展示壁にも注意が向きます。

まずは利用状況を観察することが大事です。この話に関する学生の反応に、「私だったら、ただテーブルだけにします。荷物をセットするニーズってあるので、そういうテーブルを置くだけでもいいのでは」というコメントがあって、それもなかなか言えていて、試してみたいと思いました。

私の親友であるＩＮＡ設計の柳田富士男さんが設計した、とても良い図書館があります。同じように貸出確認ゲートの横に展示壁があります。大きな図書館ですので、ゲートの所に返却、予約本受け渡しカウンターがあります。とても良い教材と思い、調査をしました。展示替えの直後で、好都合なことに男女であまり好みの差が出ない展示テーマでした。ここを通る利用者のうち、展示壁を①ちらりとでも見る、②立ちどまって見る、あるいは③全く見向きもせずに通りすぎる、３つに分類し、その割合を算出しました。このうち③全く見向きもしない人の割合はどのくらいだと思いますか。このような調査するとき、予測してから調査すると面白いですね。入館する時はカウンターの近くを通るので展示壁から離れている、帰りは逆に近いので、当然帰る人の方が目にしやすいだろう。私は入館者の 80%は③全く見向きもしないと予測しました。結果は、まさに入館時の男性の 80%は③全く見ない。ただし女性は 63%でしたので、女性の方が好奇心旺盛なのかもしれません。帰りは男性 60%、女性 40%、均して 50%は全く見ない。この数値をどう評価するか。私はこれだけの数字をあげられれば、立派なものだと思います。つまり、人は意外なほど周りを見ないのです。このことを前提に考えないと、「注意書きを貼ったのに守らない人が多すぎる、最近の人のモラルは低い」などの曲解を生みます。モラル云々の前に見ていない、そのことに気付くべきです。先ほどの図書館は、展示に長さがあるので、途中で気付く確率を上げています。逆に 100%の人が立ちどまったら大渋滞を起こします。デパートでも大きな声で呼び込みをやっていますね。そうでもしないと気付かないからです。ですから、図書館でポスターや注意書きを貼ったり、何かを展示をしたから、みんなが見てくれるだろうと思ったら大間違いで、逆に見ないという前提で、どこに、どのような方法で展示すれば、より見ていただけるかという逆転の発想が大事になってきます。デザインとは単に丸とか四角とか形だけでなく、人の心理や行動までも見据えて、効果まで捉えることを含みます。

最後に、ワークショップの事例を少し。

展示だけでなくて、利用者参加のイベントを打つのも魅力的な場のつくり方です。「新潟市立中央図書館」のこどもとしょかんには、おはなしのへやに加え、主に小学生を対象としたグループ学習室があります。その使い方の例として、「図書館の本を探してみよう」というワークショップを協働しました。子どもたちが集まって、まずは図書館員のお姉さんが、図書館の本は使いやすいように並んでいるという話をした後で、全員でその時のテーマ「秋」が載って

いる本を探します。その際、在った所に赤い札を差しておくのがミソです。『シートン動物記』の熊が冬眠する前にたくさん食べる場面に秋を感じましたと、鋭いところを突いてきた子がいました。ナスの本がたまたま３冊。４類図鑑のナス、５類の秋ナス、７類ナスの絵を描く本が集まり、すかさず図書館員が、同じナスでも書いてある内容によって分けて置くシステムを説明。それぞれの「秋」を披露しあった後、他の人が借りてきた本を返しに行きます。赤い札を手がかりに、宝探しの逆パターンのように楽しみながら、排架を実感するワークショップです。終わった後、「私は図書館のプロになった」「帰ってお父さんに教えてあげよう」など、ほほ笑ましい感想文を書いてくれました。このような実践は、グループ学習室というハードを使い込む試行錯誤でもあるわけで、設計事務所として参加する意味があります。

＜写真23＞吉田町立図書館。大人も熱中ワークショップ

「吉田町立図書館」でも、交流ストリートにて 10 周年記念として「さかな」をテーマに同様のワークショップをお手伝いしました＜写真 23＞。分類学を義務教育で学んでいない保護者たちも興味や関心を示してくれる企画です。このような活動も含めて、「魅力ある場のつくり方」を考えていくべきではないかと思います。これで終わらせていただきます。

【質疑応答】

Q. 各地の本の展示について、いろいろと説明していただきまして、ありがとうございました。

本の展示に工夫をする図書館は、今、全国の公共、大学図書館を含めて、各地で増えていると思います。私は展示の巧みさという点では、佐賀県武雄市の図書館の本の見せ方はうまいと思います。武雄市の図書館もそうだし、今の事例で、学校のチラシとかポスターの展示でもそうですが、光の当て方がポイントですね。スポットライトのように当てることで、その空間を浮かび上がらせる効果があると思います。図書館の展示というのは、たいていフラットで、図書館員はとにかくモノを並べる方に一生懸命で、あまりライティングという視点がないように思います。見せる巧みなわざを持っているところは、どういうふうに空間を演出するか、光の当て方も随分配慮しているように思いました。さきほどの日進市もそうですね。ライティングという点では、何か図書館で本を見せるときに工夫が要るのでしょうか。それが比較的容易にできればいいと思うのです。そう簡単に照明は取りつけができないのかも知れませんので、ライティングという観点から見て、本の展示について注意すべき点がありましたら、教えていただきたいと思います。

A. 確かにライティングがうまくいくと、展示物、空間ともに魅力的に見えますが、とても難しい問題です。美術館や展示場では、展示替えごとに照明の向きや台数を調整して、最適な環境を演出します。そうできるような設備投資をし、運用では天井まで手が届く足場に乗るか、あるいは特殊な操作器具を使うなど結構大変な作業を伴います。

そこで最も簡単な方法としては、どこに展示しても支障なく見えるように、つまり均一な照明計画が無難です。日進市のエントランスホールの場合は、中央部に可動展示パネルをいくつかのパターンでセットできるので、そのためのスポットライトを用意していますが、展示パネルの位置によってその都度ライトを変える必要があり、実際の運用では標準パターンを決めて、なるべく照明を動かさない運用を工夫されています。あるいはさきほどの映画館のように、特定の壁面のみの展示に限定すれば、いつも同じ壁面にスポットライトがあたり、雰囲気を保てます。ホテルなどでは積極的に光環境に濃淡をつけ陰翳をつくることで雰囲気を演出しますが、モノで埋め尽くす比率の高い図書館では均一照明を原則として、どこかにそうした気分を変える場を組み込む、まさにソフトとハードの関係性にスポットを当てるべきでしょうね。

平成２５年度ＴＬＡ総会報告

平成 25 年度東京都図書館協会総会は、平成 25 年 7 月 12 日（金）午後 2 時から東京都立中央図書館で、出席者 46 名、委任状提出者 375 名（定足数 260 名）で開催された。日本図書館協会森茜理事長のご祝辞を披露した後、議長に阪田　蓉子氏を選出して、議事が進められた。

1　平成 25･26 年度役員

2　平成 24 年度事業及び決算報告

(1) 会の運営

ア　総　会

日　時：平成 24 年 7 月 19 日（木）
午後 2 時～3 時

会　場：東京都立中央図書館　多目的ホール

出席者：出席者 32 名、委任状提出者 399 名

イ　理事会

第 1 回　平成 24 年 6 月 11 日（月）

- 平成 24 年度役員
- 平成 23 年度事業報告
- 平成 23 年度決算
- 平成 23 年度会計監査報告
- 平成 24 年度事業計画（案）
- 平成 24 度予算（案）

臨時審査会　平成 24 年 11 月 13 日（火）

- 平成 24 年度事業計画の再検討について

第 2 回　平成 25 年 3 月 21 日（木）

- 平成 25・26 年度役員の選出（案）
- 平成 24 年度事業報告
- 平成 24 年度決算報告（案）
- 平成 25 年度事業計画（案）
- 平成 25 度予算（案）

(2) 事　業

ア　講演会の開催

日　時：平成 24 年 7 月 19 日（木）
午後 3 時～4 時 30 分

会　場：東京都立中央図書館

テーマ：大災害における危機管理

講　師：内田　勝也氏（情報セキュリティ大学院大学教授/横浜市 CIO 補佐監）

参加者：60 名

イ　研究助成

申請なし

ウ　会報の発行　　第 92 号（平成 24 年 6 月）

エ　後援

- 第 14 回図書館総合展
（併設　学術情報ｵｰﾌﾟﾝｻﾐｯﾄ 2012）
平成 24 年 11 月 20 日(火)～11 月 22 日(木)
パシフィコ横浜

(3) 決算

＜収入＞

交付金	407,575 円
会　費	1,000 円
雑収入	117 円
繰越金	873,669 円
計	1,282,361 円

＜支出＞

会議費	13,807 円
事業費	155,518 円
事務費	316,911 円
予備費	0 円
計	486,236 円

＜翌年度繰越額＞

収入済額	1,282,361 円
支出済額	486,236 円
差引翌年度繰越額	796,125 円

以上の平成 24 年度事業及び決算報告はすべて承認された。

3　平成 25 年度事業計画(案)及び予算(案)

【事業計画】

(1) 会の運営

ア　総　会：平成 25 年 7 月 12 日（金）

会　場：東京都立中央図書館

イ　理事会　年 2 回開催

(2) 事　　業

ア　講演会の開催　平成 25 年 7 月 12 日（金）

会　場：東京都立中央図書館

講　師：柳瀬　寛夫氏　（建築家・株式会社岡田新一設計事務所）

テーマ：図書館における魅力的な空間のつくり方

イ　施設見学会、IT 講習会の実施

ウ　研究グループ助成

エ　会報の発行　第 93 号（平成 25 年 6 月）

オ　図書館の発展に寄与する事業について後援依頼があった場合には、後援名義を承認する。

【予　　算】

＜収入の部＞　（単位：円）

科目	25年度予算額	24年度予算額	増　△減	説　明
交付金	376,637	794,400	△417,763	日本図書館協会より
会費	6,500	1,000	5,500	JLA会員外の会費
雑収入	300	300	0	預金利息
繰越金	796,125	873,669	△77,544	
計	1,179,562	1,669,369	△489,807	

＜支出の部＞　（単位：円）

科目	25年度予算額	24年度予算額	増　△減	説　明
会議費	43,000	23,000	20,000	総会・理事会資料等
事業費	450,000	730,000	△280,000	研究助成、謝礼、会報他
事務費	374,000	507,000	△133,000	総会通知郵送費等
予備費	312,562	409,369	△96,807	
計	1,179,562	1,669,369	△489,807	

以上の平成 25 年度事業計画及び予算は、原案どおり承認された。

平成２６年度総会資料

◎　平成 26 年度　事業計画（案）

Ⅰ　会の運営

1　総　会

日時：平成 26 年 9 月 12 日（金）
午後 2 時～午後 3 時
会場：都立中央図書館　多目的ホール

2　理事会

第 1 回　平成 26 年 8 月 7 日（木）

- 平成 26 年度役員
- 平成 25 年度事業報告
- 平成 25 年度決算
- 平成 25 年度会計監査報告
- 平成 26 年度事業計画（案）
- 平成 26 年度予算（案）

第 2 回　平成 27 年 3 月頃

・平成 27 年度事業について　ほか

Ⅱ　事　　業

1　会報の発行　　第 94 号　平成 26 年 8 月発行

2　講演会の開催

日時：平成 26 年 9 月 12 日（金）
午後 3 時～午後 4 時 30 分
会場：都立中央図書館　多目的ホール

3　図書館見学会の開催

1 月頃を予定　場所：未定

4　研究助成

随時的研究（@10 万円を上限とする）
継続的研究（@ 5 万円を上限とする）

※　講演会、講習会、見学会、研究助成等の詳細、及び募集方法等につきましては、日本図書館協会の HP 及びメールマガジン又は都立図書館の HP などでお知らせいたします。
日本図書館協会（http://www.jla.or.jp/）
都立図書館
(http://www.library.metro.tokyo.jp/tabid/2265/Default.aspx)

◎　平成 26 年度　予算（案）について

平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日

1　収入の部

（単位：円）

科　　目	26年度予算	25年度予算	増　△減	説　明
交　付　金	360,700	376,637	△ 15,937	日本図書館協会(JLA)より
会　　費	7,500	6,500	1,000	JLA会員外の会費
雑　収　入	300	300	0	預金利息
繰　越　金	605,955	796,125	△ 190,170	
計	974,455	1,179,562	△ 205,107	繰越金、交付金減による

２支出の部　　（単位：円）

科　　目		26年度予算	25年度予算	増　△減	説　明
1　会議費		43,000	43,000	0	
	(1) 総会費	30,000	30,000	0	総会開催通知、出欠はがきの印刷
	(2) 役員会費	3,000	3,000	0	理事会開催に伴う雑費
	(3) 旅費	10,000	10,000	0	理事会開催に伴う交通費
2　事業費		370,000	450,000	△ 80,000	
	(1) 講演会費等	80,000	80,000	0	講師謝礼、講演記録反訳等
	(2) 会報発行費	160,000	140,000	20,000	会報印刷費用
	(3) 研究会費	0	110,000	△ 110,000	IT講習会等
	(4) 研究ｸﾞﾙｰﾌﾟ助成費等	100,000	100,000	0	随時的研究　@100,000 継続的研究　@50,000
	(5) 見学会費	30,000	20,000	10,000	
3　事務費		344,000	374,000	△ 30,000	
	(1) 需用費	20,000	20,000	0	事務用消耗品等
	(2) 通信運搬費	320,000	350,000	△ 30,000	郵送費等
	(3) 職員費	0	0	0	アルバイト賃金
	(4) 雑費	4,000	4,000	0	振込み手数料等
4　予備費		217,455	312,562	△ 95,107	次年度の総会費、会報発行費等を繰越す必要あり
計		974,455	1,179,562	△ 205,107	

§TLA会員申込について§

TLAでは会員の申込を受付けております。まだ会員でない図書館の方々に、TLA会員登録について、次のようにお知らせください。

日本図書館協会加入の東京地区会員については、自動的にTLA会員として登録されます。それ以外の方で入会を希望される方は申込及び会費の納入が必要です。(年会費500円＝普通会員)

入会を申込まれる方は、事務局まで、ご連絡ください。

発行
東 京 都 図 書 館 協 会
〒106-8575　東京都港区南麻布5-7-13
都立中央図書館内
TEL 03-3442-8451